
わたし×とりっぷ×おんせん

権

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたし×とりっぷ×おんせん

【Nコード】

N8805W

【作者名】

椋

【あらすじ】

あれ？なあんてこんなところに落とし穴？しかもどこまで続くわけ？

近所の悪がきたちが作ったにしては随分と手の込んだ悪戯だなあ
ゝなんて馬鹿なことを考えた私を殴りたい！！

ここは違う世界で、私はいつの間にかもう人外で、この国は財政危機だど？！そんなこと私に関係ないし！ほっといでちょーだい！

私はただの温泉の精ですから！！人間じゃない以上干渉しないし手も貸さないわよ？！あつ、ここから先は私のテリトリーだから！

なんちゃって精霊になった微妙な年齢の女の子のお話です。

落とし穴×人外決定?! (前書き)

まだ続くかは微妙な感じですが、思いつく限りは書き続けますので楽しんで行って下さい。

落とし穴×人外決定?!

「……何?ここどこ?」

気がつくと水の……いや違う、お湯の中?

「え、なんなの?私、確かに間違いなくさっきまで家の近くの公園に……あれ?さんぽ……して、た」

こぼこぼ……こぼっこぼ……こぼこぼ

「……砂場に、落とし穴」

……そうよ!私、落とし穴に落ちた!?

あの公園って何時も悪ガキが悪戯しかけてて結構近所じゃ有名だから注意してたのに……なんで引っかけたんだろ?って言うかどうしてあの公園を通ったのか……。

しかもあの落とし穴!子供が作ったにしてはずいぶん深かったわね……それに、穴の底はとっても広くて白い部屋になってて、それで……

「それで、あの白い部屋で、そう!チャラチャラした若い男にあって」

ああ……

「わたし、あのせかいからおとされたんだ……」

そう、私はあの世界から文字通り突き落とされて、そして新しい世界にやってきた。

「どうしろって言うの？こんな……こんなことって」

今の自分をよく見てみると、新事実発見！私透けてる！！

それにしても、この身体って水じゃなくてお湯で出来てるのね。

「ここも、もしかして天然温泉？正に秘湯って感じねえ」

それにしてもこの身体って一体どうなってんのかしら？頭の方から足の先までお湯であちこちから湯気まで出てるけど、それはつまり……私ってもう人間じゃないの？人外決定？！

この世界がいったいどんなところかも分からないのに、自分は人外だし、

まあ、間取りで言うところの6・5畳くらいしかない温泉だけど、周りは綺麗な深い森だし、心配な食糧も……この身体じゃお腹空きっこないものねえ？時間だけはあるんだから、先の事はのんびり考えよう！

「ああ気持ちいいなあ、温泉にゆっくり浸かるなんて何年振りかしら？あっちの世界も気にはなるけど、どうにもならないことを考えたって疲れるだけだし、知らなきゃいけないことが出てくれば嫌でもそっちからやってくるわよ」

ぶつぶつぶつぶつ、温泉の真ん中で人型のお湯が独り言って……
なんかヤバイ人みたいだけど、気にする理由も今は特にないいし良い
わよね？

なあゝんて温泉に浸かり続けること一週間。

さすがに私でも飽きるわ。

でも、ただ温泉に浸かってのんびりしていたわけじゃないのよ？
一応、実験はしてみたの！

まず、前にも言ってたけど、私はお腹が空くことはないみたい。
でも、身体を温泉から浮かせて暫く経つと何となく疲れたなあって
感覚はあって、そんなときは温泉に全身を沈ませればさっぱりする
の。やっぱり私が温泉の精っての、ちょっとは当たってるのかも……。

それから、私は温泉からは出られない。と言うより、地面には存在し続けられないと言うべきかしら？ さっきも言った通り温泉に浸かってないと疲れちゃうしね。でも、温泉の湧きだしている穴が底の方にあるのを見つけたし、そこから他の場所にも出れそうだと思うんだけど……穴には良い思い出がないし、何より嫌な予感もするからもう少しこの場所で色々と探ってみようと思うわ。

小さな国と国庫の危機（前書き）

今回は主人公が落ちた世界にある、小さな小さな国の宰相様Si
deで話が進みます。

小さな国と国庫の危機

さいど　小さな小さな国の宰相　ルーイリア・シェイル

ああ……どうしたらいいんでしょう？このままではこの国は破滅です……。

こんな小さな小さな国が、今まで大きな国に吸収されずにやってこれたのは我が国に相手国との対等な取引対象が存在していたからに他なりません……。

だというのに！建国当初から続いてきた国の大きな収入源が十年前から先細りし、ついには二年前、無くなってしまった。他に財源と言える物はこの国に伝わる技術くらいなもので……大切な先人の遺してきたモノを他国へ売り飛ばすのだけは避けねばならない！王族含め大臣たちもあの手この手で国庫を削りながら何とかやってきましたが……もう、

「ああ、偉大なる神々よ！このような仕打ちはあんまりでございます！！このままでは……このままでは輸入に頼ってきた我が国の民は食べるものにも……ああ……どうすればっ」

「うっせーぞ！！この男女が！少しは静かに出来ねえのか？！大体！それを考えんのがお前の仕事だろうがっ」

がんっ　と勢いよく蹴った椅子が大きな音をたてて倒れた。

小さな小さな国のこじんまりとした王城には、ささやかな王の執務室が存在するのだが、普段は物腰の柔らかな心優しい王様が静かに黙々と書類に王印を押している為、物音をたてる者はまずいない。この国の国王は今から七年前、若干十五歳でありながら先王の急

死に伴い王座に祭り上げられた庶子である。

それまでは一国民として王都から随分と離れた村に住んでいたが、当時の王族には国王夫妻が不仲だったせいもあり他に嫡子もおらず、他にいるのは血だけは立派な金や権力が狙いの腹に一物抱えた奴らばかりで話にならず……国王の死後愛人へ宛て書いたまま仕舞い込まれていた手紙が見つかった為に発覚した不祥事であったが、引き出しから夫のへそくりとはよく言ったもので予期せぬ幸運ここに極まれり！王族や国民がどう思おうが、後継者がいなければどうにもこうにも国は成り立たない。

大臣たちは口裏を合わせ、庶子の男の子を国王の座へ据えることに成功したのである。

「もう、2人とも止めてよ。そんなことしてたって何の解決にもならないし……お腹空くだけだよ」

「では陛下！そのような弱気な態度でいったいどのようにこの国の氷河期を乗り切るおつもりですか！？」

ああ！このようにせせこましい執務室で会議などしてもいい案など絶対に出るものですか！

だいたい、この国の国王で有らせられる ノイデイル・スモールキングダム様 国軍総大将のガドガン・ドドツチ そしてこの私！わたくし学の神イーリヤ様の申し子と謳われる宰相 ルーイリヤ・シエイルが揃っていると言うのに……何の名案も浮かばないとは、

「これはもう、この国は滅びゆくのみとイーリヤ様がお考えなのだろうか？」

「馬鹿かお前は！ふざけたこと言ってんじゃねえぞ！？」

「わたくし私は……」

「ほら、もう止めて。とにかく！この国の国庫はもうすぐ底をつく、それは事実だ！でも僕は、まだ諦めたわけじゃない」

「それは……？」

ノイデイル様は、いや、デイル様は王族の特徴の一つである深緑の瞳を輝かせて仰った。

「……僕は、賭けてみたいんだ。どちらにしろもう駄目かもしれないなら、この国を建国当時から支えてきたあの場所に行こうと思う」

「へいか……？な、何を仰っていらっしゃるかお分かりですか？わたくし！私は反対です！先王がどうなったかもうお忘れですか？！そもそも、あの場で何があったのかさえ今だ解明に到ってすらいらないと言うのに……かの地に住むとされる主も、ぬしきっと我らを歓迎してはくださらないでしょう！」

「……」

「ガドガン！！貴方も何とか言ったらどうです！？」

デイル様はゆっくりと執務椅子から立ち上がると、奥にある大きな窓際まで歩いていく

「もう、そんなに心配しなくても……」

「何を、何を言って！心配などしていません！私はただ！デイル

様がご自分のお立場を理解していらっしやらない様子なので」

ふ、とディル様の口元は弧を描き、かの方は木の枠で出来た古めかしい窓枠に手をかけ

「大丈夫だよ、ルーは本当に心配症だなあ」

そう仰いながら窓を開け放った。

ディル様の腰まである栗色の髪は風に舞い、かの方を初めて拝見したあの日を思い出させた。

あの頃、この国は混沌としていた。

王とその認めた者しか、足を踏み入れることも許されないあの森の奥。建国当時からこの国の財源を支えていた神聖な地で、先王は失態を犯した。

供もつけずに出かけ、顔を青くして帰ったかと思えば、次の日からこの国は静かに、音も立てずに傾き始めた。

気づいた時には、真相を知る先王は心労で急死した後で、いったい何が起きているのか……森に入ることが出来ない私達には調べる術すら存在はしなかった。

私はその頃、若輩ながら宰相補佐の地位にいたが、国王の死から国の危機へと次々と起こる問題に国中がざわざわと落ち着かない中、懸命に仕事をこなしていた。

そんな時だった、かの方の噂を聞いたのは……。今正直に申せば何の期待もしていなかったし、ただ国王の席さえ埋まれば国民の安心材料にはなるだろう……くらいには考えていた。ただ、小さな村で静かに暮らしていた少年が、今こんな現状の国の王に祭り上げられるなど、その子が話を聞いて最初に抱いたのはいったいどのような感情なのだろう？きつと私なら……恐怖だ。年も割と近い方だと聞き及んでいたのですんな風にな自分と照らし合わせて不憫にも思ったものだった。

そんな感情は、かの方が初めて城に入城された際消え去った。

かの方が馬車から私たちの前に降り立ったあの瞬間、きっと瞳さえ見せなければ生涯唯の国民として暮らしていくことも出来たのでは？とその髪色を見て誰もが思っただろう。

だが、その瞳と顔立ちが目映った瞬間、その場にいた古参の大臣や侍女頭、重要な要職に就く者達全てがその場で一斉に膝をついたのだ。

さながら、まるで演劇でも見ているようだ。などと、あの時の私はその場で起こった全てを、まるで他人事のように傍観していたというのに……今こうして陛下のお傍で宰相と言う重職についているなど、人生とはなんと不可思議なものか。

「なあ、ルーよお。あの森には陛下とその認めた者のみしか立ち入ることは許されていない。そうだったな？」

まったく！こうして私が何か考え事をしている時に限って、この男が邪魔をしてくるのだ。

「ガドガン、あなたと言う人は！私の問いかけを無視しておきながら、そんな小さな子供でも知っている事実の確認をしようなどと！！これだから頭から足の指の先まで筋肉で出来ている人は！！……もう何も仰らなくて結構！余計に話がこじれますからね」

「くっくくっくつ、まあそう怒んなよ。なあ、デイルの言うことももつともだと思わねえか？」

「何をまた間拔けたことを……」

「あの森には、陛下がいなければ入れない。そして入らないこと

には何も始まらねえ、そうだろ？」

ガドガンは筋肉のせいで盛り上がった大きな体を、本人が特注で作らせたソファに納めて、偉そうに足まで組んでいる。

大体、この部屋は陛下の執務室だというのに！自分専用のソファの持ち込みをすると言った時も散々抗議をしたものだが、相手がガドガンでは何の意味もないことにもっと早く気が付くべきでした。

「……だからこの国の国王であるお方を危険に晒せと？」

「本人がそうしたいと言ってるんだぜ？なあ、デイルよう」

呼びかけられたデイル様は、申し訳なさそうに私に身体を向けて仰った。

「きっと今この国が平常だったなら、ルーの話を聞いていたと思う。でも、もう待ってるだけじゃ駄目な気がするんだ……僕が王の座に就いてから、最初は国内を束ねるのと勉強でそれどころじゃなかったし、まだ国庫にも余裕があったから言い出せずにいたけど、あの森に行つてうまく解決できればまたこの国は潤つてこの城で働くみんなも、国民も明るくなると思うんだ。だから、行くよ！僕は行く」

デイル様は、まるでその深緑の瞳には国が豊かになる未来が映っているかのようにはっきりと告げたまま、遠くを見て居られた。

「よく言った！そんなじゃ俺もついてくぜ」

ガドガンは……いつもの軽い調子でディア様に答えていた。

私は……。

「ならば、私も供にお連れ下さい。ガドガンは剣に、私も多少は身を守るすべを備えておりますゆえ……盾くらいにはなりましょう。これはお許しを願う問いではありません。ディア様が仰ったように、私も行くのです！」

ディア様に断られる前に、はつきりと口にしていた。不思議なもので、どうするか考えるまでもなく一瞬でした……口に出してしまえば、なんと言うことはない。

初めから私の心は、決まっていたのだ。

私の名は わたくし ルーイリア・シェイル 小さな小さな王国の宰相の仕事に従事している若輩者でございます。

このたび、まるで小動物のように穏やかな国王と、この国で一番気に食わない筋肉男との三人で普通に生活していたなら生涯踏み込むことのない地へと連れだって足を運ぶこととなりました。

わが神イーリヤよ、どうか私と陛下にご加護を！！

小さな国と国庫の危機（後書き）

誤字脱字などございましたら優しくご一報下さると助かります。

驚きの新事実×前任者の不倫！？（前書き）

何だか説明っぽくなってしまいました！
ちょこちょこ直すかも？です。

驚きの新事実×前任者の不倫!?

ぐによーん、音にすればきつとそんな感じな今の私。

自分の分身である温泉の中には横穴があったのをさっき確認したが、やっぱり隣の芝生は青いものよ!!

何が言いたいかと言うと、温泉から出られないとは言えやっぱり陸地にも興味はあるわけで……。そこで私は、出られないならお湯で出来てる身体を上、うえーに伸ばして出来るだけ高いところからこの森を見渡そうと考えたわけ!!

「うそでしょー……」

今更だけど、冷静になって見ればここは凄いとこみたい……。

私の温泉の周りは比較的平地なんだけど、まあく切り取ったように一定の距離を過ぎると物凄い緑が広がっていた。

雑草もキノコも木も私の知っているサイズじゃない。事实は小説よりも奇なり!なんて諺が脳みそを支配するほど、もう測れない大きさでまるで日本じゃ知らない人はいないアニメの森にいるような……まさかトトロ? ははっそんな馬鹿な……

「人間がいても、まさかこの森と同じでサイズ違いでした!とか言わないわよね?」

うゝ、もしそうだったら永遠に温泉に同化し続けて二度と人型にはなるまい!! とここに誓う!

「あゝあ、凄い嫌な予感しかないけど！……まあ他にいく所もないし、行きますか！」

とぽん　とお湯の中に響く音

この温泉は、幅はそんなにないのに深さは物凄くて底に到着してから上を見上げて、光さえあまり届かない。

（どっちにいいのかな？）

自分がお湯だと潜ったままでも喋れて便利だと思ったんだけど、まあ対話相手いないしあんまり必要ないかも？

この温泉の底には、横穴が二つ。

（右と左。んゝ見た感じは右から噴き出したお湯がここに溜まって、ちよつと上に開いてる左の穴へ流れてるのかな？）

お湯と同化して、もはや自分でも見えない腕を組んで考える私。

（やっぱりここは、右から行くか）

こぼこぼおゝと泳いで右の細い穴へと入り込むと、温度が違いすぎることに今更気づきました！

（え？なにこのお湯！！自分の身体お湯だから火傷の心配はないとしても熱すぎでしょ！？これは、もしかなくて……私の住んでる温泉って源泉なのかな？）

すいーっと長いこと狭い細穴を流れに逆らい泳いで行けば。

出たところは地中で、そこには地上の温泉では考えられないほどの茹るような熱湯がまるで海のように広がっていました。

（昔、何かでかるーく調べたことがあったけど……。確かこういう地中に溜まった熱湯が何かの弾みで裂け目や穴から湧き出てきて、地上の窪みなんか溜まることで源泉になるんじゃないかな？ ところからまたどこかに流れ出て行くことで人間が浸かれるくらいの温度まで下がるのよね？……。ん？ 私が住んでる温泉が源泉と言うことは、あそこって結構温度高いのかな？ それで、左の穴から先が低い温度の温泉ってことかあ）

それにしても、自分がお湯だからかもしれないけど温度的にはこれくらい熱くても全然余裕ねえ。なんてすういすうい泳いでいたら目線の端に可笑しなものが映った気がした。

（……なにあれ）

ここは地中深いしかも熱湯の中、なのに目の前には

（……文字？ いや、なんで手紙風なの？）

地上の広い海にも終わりがあるように、この地中の熱湯海にも端っこがあるわけで……。

私もまだぐると全部回ってはいないと言うのに、もう可笑しなものを見つけてしまった。

このお湯に浸かってどろどろの土にどうやって書いたのか分からないけど、完全に日本語じゃない字でグニャグニャとなにやら綴ら

れていた。

（なんで読めるの私?!）

しかもそれが読めちゃう私に、自分で驚いてちよつと深呼吸

（って水中だし!!……まあいいわ、何々?）

その手紙は、明らかに私宛で、始まりはこうだった

新任の精霊へ

わたくし

私は貴女が生まれる以前、千年ほどこの土地を加護してきた湯を司る精霊であり、今はこの命が尽きかけた状態でこの文を認めております。

時間もないので簡潔になりますが、どうか良く読み、そして自身の糧とするよう願います。

まず、生き物についてですが……この世界には動物や植物、精霊の他にも人間と呼ばれる種族がおります。時間があれば言いたいことは多々ありますが、今はただ、人間と一口に言っても様々な掛け合わせで獣人や魚人など驚くほどの種類があり、彼らは知能が高いので関わるのには過剰なまでの注意が必要だと言うことを良く覚えておいてください。

そして、この土地の事です……この場所に精霊が誕生するようになったのは我々長命種でも思い出せぬほどの昔のこと。だからと言って何か使命があるのか?と聞かれても、私^{わたくし}たちには特にすることはありません。ただ自身が健^{すこ}やかであれば、この源泉もこの場所から伸びている水路も、それにより潤っている木々も、瑞々（みず）しい草木を食す小動物たちも、彼らを口にする大型動物たちも、皆が当たり前に生きる事ができますから。

……そう、貴女さえ健やかであれば。

私はそれすら守ることも出来はしませんでした。^{わたくし}

これは、私の懺悔ですが……読みたくなければ消してしまっ
て結構です。

私は、人間の男と恋を致しました。

その男は、この森と土地を含めた島すべてを治める小国の王だ
と名乗りました。

この土地は国の中でも特別な場所で、歴代の王たちは皆この場所
へ足を運ぶのが慣例だとも言っていました。

私は、それまでただぼうつとお湯へ同化し、長いこと漂っていた
ので人間を見たのは初めてで……恥ずかしながらその男へ興味を持
ってしまったのです。

数年に一度、この場所に沈めた精霊になる前の、水卵^{すいらん}である貴女
を見回りに来ることにくらいしかすることも無かった私に観察対象、
しかも対話が叶う相手が現れた。

そのことに年甲斐もなく浮かれた私は……彼の願うまま今までも
自然と流れていた源泉の湯を横穴へ大量に流し込んでしまいました。
気が付いたころにはもう遅く、繋がっていた生態系の輪が歪み始
め、今まで行き渡っていたはずの土地は、源泉に遠いところから徐
々に干からび、木々も動物たちも弱り、死にました。

だと言うのに、事実を知ってもなお、私はあの男が恋しかったの
です。私は水路を使いあの人の住む土地へと向かい、そして己がい
かに愚かであったのかを知りました。

あの男には美しく強い妻がおり、そして儚げで優しい愛人まで囲
っている！それに、愛人との間に男児がいるのだと……。

私の心は凍り付き、気が付けばこの場所へ戻り、まるで泥水のよ
うに底へと沈みました。

精霊がこのような状態では、いずれ土地は枯れ果てる。そうわか
っていても、どうにもならないのです。

ああ、もう湯の勢いが弱まり始めている……。

数日して、あの男がこの場所へ足を踏み入れたのがわかりました。

けれど、私は顔を出さず、待っている間に獣に襲われでもしたのでしょう、そのうち足早に土地を去り、そのままもう会うことはありません。

こんな愚かな私の後任など、きっと御嫌でしょう。

けれど、他にもう手段ありません。

共に生きてきた大地や木々や動物たちに、これ以上の迷惑をかけるわけにもいかないのだと、どうか産まれたばかりの貴女へ重責じゅうせきを押し付け消えることを理解していただきたいのです。

私は何もして差し上げられませんが、ここを出て左の穴を抜ければ大きな森と人の土地があり、穴の先にある川の淵に生えた老木に年を召した精霊が居おります。困りごとがあれば、彼を頼るといいでしょう。

(……)

全部読み終えたさ、だがしかし!! 重責って……なんで生まれ変わってまでそんな責任追わなきゃいかなのよ!!? だいたい!!

(その王様ってなんなの!? 何様のつもりよ?! 不倫なんかしやがって!! 精霊に手を付けるなんて、王様って土地守ってる精霊より偉いわけ? 前任者も人間に恋って……物語じゃないんだから相手選んでよ)

冗談でしょ?! ってノリの私! と言うかそのまま冗談でお願いします!!

(はああああ、でも何にもしなくて良いんじゃないの? そう書いて……って消えてるじゃん)

何時の間にか消え去ったお手紙……。

（もうっ！！しらんしらん。私は関係ないし！健やかであれば良
いって書いてたし！左の穴は要するに森と人間の土地に繋がってる
わけでしょ？そんなとこ絶対行かないからね！！私お湯の精霊だし、
人間は範囲外ってことで！！）

あゝ疲れた！！暫く寝るわ！！

驚きの新事実×前任者の不倫!？
(後書き)

旅路とそれぞれの想い

|||||||さいど ルーイリア・シェイル

あの日から幾日経ったことでしょう。
わたくし

私達一行は、政務をそれぞれの片腕や信用のおける大臣たちに任せ旅立ちました。

「陛下、前の村からもう3キトが経ちましたが……お疲れでは？
少し休みましょうか」

もう王都からも随分と離れ、北へと向かい進み続けております。

「おいおい、一日にいったい何回休憩するつもりだ？こんなじやいつ目的地につけることやら……」

わたくし
私は、旅慣れぬ陛下がお疲れになっても、気を遣い口に出せず苦しんでいるのでは？！と思ひ立ちお声をお掛けしたと言うのに……。
またしてもこの男は！！

「ガドガン！！あなたと言う人は、陛下や私は文官職わたくしなのですから！もう少し気を使うことは出来ないのですか？！これだから脳みそまで筋肉の武官は困ります！！」

「ああ！？何言ってやがる！お前がピーピーうるせえから上等の龍馬りゅうばまで用意してやったんじゃないか！！これ以上どう気を使えばいいのか教えて欲しいもんだぜ！！」

確かに、移動をどうするか考えているときに、ガドガンが珍しく

！！自分の伝手つてを使い貴重な龍馬りゅうまを用意してきたのには驚き感謝しましたが！

元々城勤めで移動自体に慣れていない私わたくしや、もう何年も乗馬すらしていない陛下に長時間の龍馬での移動が耐えられるはずもないのです！！まったく、そういうところが足りないと言うのに！！

「この脳筋っ！！」

「あんだとっ」

「ガドガンも、ルーも、まだまだ旅は続くんだし仲良く行こうよ」

本当に注意する気があるのか、ないのか？陛下と言う立場にありながら、言われなければ分からないような平民の服を着て、この中の誰よりも似合っている国王様は仰いました。

「ねえルー？それよりも、この龍馬りゅうまは僕も初めて見たけどそんなに珍しいの？」

龍馬に跨ったまま、陛下はお聞きになられました。

これは、何と言う至福でしょう！？普段は国政の事にしか勉強の手を伸ばされない陛下に、私の雑学わたくしをお聞かせするチャンスが訪れるとは！！

「うおっほん！それはもう！！この龍馬と呼ばれる生き物は、この世界にはもう数えられるほどしか生息が確認されておりませんので世界的保護動物に指定されております。基本的には、彼らの行動は自由であり、国や個人が所有することも許されてはいません。なぜなら、彼らは古いにしえより我らの友であるからして……」

「……えーと、ガドガン？」

「ハア……」

ガドガンは大柄で厳つい彼に似合わず、弱った子犬のように小さく首を振った。

|||||||さいど ノイデイル・スモールキングダム

僕は大きな海原にぽつんと浮かぶ、小さな小さな王国の国王 ノイデイル・スモールキングダム

僕は、たった数年前まで、ただの デイル と呼ばれていた。

この小さな王国の南に存在するあまり大きくない村で育ち、そして適当に大人になり、結婚をして、子供が出来て、年を取り、孫や他の家族達に看取られて一生を終える。普通に、生きていけば、周りの大人たちを見ている限りそんな風に一生は過ぎていくのだと思っていた。

初めて王国からの使いが来て説明を受けた時は、正直どうしたものかと悩んだものだった。でも、異変が始まった以上、村に残ってもこの国自体が立ち直らない限り普通の人生すら歩めはしない……。まあ、王都に出向いて無理だと思ったらとにかく頭のいい人にお任せしても許されるだろう。だって、僕はまだ子供の領域にいるのだし。

けれど、国政はそんなに甘くはなかった。なにより、僕に付けら

れたお目付け役がとてつもなく厳しい人で、何度故郷へ帰りたいと夜中にこっそり泣いたか分からない。そのたびにお目付け役はどこからかやってきて僕を叱りつけ、そのまま長い説教が始まり、気が付けば早朝で寝不足のまま朝食を食べ、また勉強をさせられ。このままじゃ頭がおかしくなると思いつい反抗したら……

「あの頃は僕も青かった……」

城の天辺に麻紐一本で吊るされ、気が付いたときに翌朝自室のベットの傍らではルーが号泣していた。

それからと言うもの、お目付け役の辞書には情状酌量とか隣人を愛すとかの言葉は載っていないとしみじみ理解し、二度と彼の人に反抗の意志を見せるようなミスは起こさず慎重に慎重を重ね日々を過ごし、平和に今日まで生きてこれたのだ。

「ありがたい話だ。まったくもって……」

「んあ？　なんか言ったか？」

ルーの小難しい解説を片耳で聞き流し、懐古かいこに浸っているとつい声に出してしまっていたらしい。

何もないのどかな田舎道を、彼の体格に合う大型の龍馬りゆうばに跨り、またがのしと自然を眺め進むガドガン。普段は訓練ばかりして、部下にも恐れられる厳ついイメージの強い彼にはあまり似合わなくて少し笑える。

「いいや、少し昔の事を思い出していたんだ」

「あゝ、昔か」

「うん」

彼も僕の護衛をしていたから、あの頃の強烈な数年は強く記憶に残っているのだろう

「すげえ、お人だったが、今は何やってんだがなあ」

「うん、何も分からない僕に国政の一から十までとことん叩き込んでくれて、今となっては感謝だけど。正直二度と会いたくないよ、僕はね」

顔を顰めて答えた僕に

「くっくくっく、そおだろうなあ……」

含み笑いをして答えるガドガン。

「そういえば、ルーに聞いておいて難だけれど……龍馬^{りゅうま}ってそんなに珍しいのかい？」

これ以上噂話を続けたら、その辺から本人がひょっこりと現れそうで……それは何があっても避けたい僕は話題を変えて聞いてみた。ルーの話は少し難しいから僕向きじゃないしなあ……。

「ああ、まあこの国の年より連中がまだ若かった頃は、ガキどもの寝物語に使われるくらいにや有名だったらしいが。最近じゃ個体数も減って、生息地も限られてるからなあ……龍馬^{りゅうま}の始まりの伝承なんかもあるらしいが、古い話だ。今じゃ知ってる奴の方が珍しいかもなあ」

難しい数式でも解いているのかと思うほど、ガドガンは眉間にしわを寄せて思い出してくれたようだった。

「ま、俺はこっち出身でもねえし……あんま詳しくはねえな。詳しく伝承を聞きたいならその宰相閣下にも頼みな」

「そうかあ、ありがとう」

勉強を毛嫌いするガドガンがこれだけの事を知っていただけで十分だ。

そう思い、彼に微笑みかけ礼を言うと……ガドガンは照れているのか、濃い紫の短い髪を掻き耑り、黒く円らな瞳を細め

「ああ、折角王都を離れたんだ。今のうちに聞きたいことや、見たいもの、好きなことしろ」

そうそっけなく、暖かな言葉をくれた。

「うん、ありがとう」

僕はただそう返すと、今度はいまだに一人で話し続けているルーに向かい

「ルー。生態については今度聞かせてもらうから、今は龍馬^{りゅうば}の伝承だけ聞いてもいいかな？」

このルーイリア・シェイルと言う男は真面目で、出身は王都ではないらしいが、十歳の頃から王都の学院で学んできたと何時だったか本人から聞いたことがある。ミルク色の髪に、同色の瞳、これで

内面まで素晴らしいなら今頃城のメイドたちから引っ張りだころうに……彼は恋愛ごとには興味がなく、仕事一筋なので僕や近親者以外には容赦がなく、密やかに呼ばれる二つ名は、狂氷麗人^{きょうひょうれいじん}。まあ、その理由はのちのち話すとして……

「と呼ばれておりまし……は、はい！伝承でございますか?!ですが、私^{わたくし}が知っている物語は全て語り終えるのに三日はかかりますので……。お話しするのは次の村に着くまでの間だけ、内容は一部省略させていただきますが宜しいでしょうか？」

はっとしたように僕を見てから、申し訳なさそうにへにゃんと眉を下げルーはそう聞いてきた。

「三日!? そんなに長いお話なんだあ……うん、じゃあ省略版でお願い」

「は！承りました。

まず、龍馬はとても大人しく、賢く、他の生き物に対し、とても優しい生き物でございます。

けれどその始まりは、まるで作り話のようで……。

^{わたくし}私も初めて聞き及んだ当初は困惑いたしました……まあ、物語の始まりはこうです。

……とある冒険者が美しい黒い毛を持つ、大型の牡馬と共に小さな村に立ち寄ります。

その村は、豊かな山々に囲まれた小さいながらも豊かな村でございました。

けれど、村に住む者たちの表情は皆一様にどんよりと晴れることなく、むしろ今にも村を逃げ出したいような表情を浮かべている者も多く、冒険者は尋ねます。

「まるで空でも落ちてきたような顔をしているが、いったい何があったのか」

すると、そこに通りかかった村の子供はこう返しました。

「空は落ちてこないけど、その山に龍が住み着いたんだ」

それを聞いた冒険者は納得しました。

この村は、山の恵みを糧として暮らしてきたのです。その山に龍が住み着いたなら、日々の暮らしにも困ってしまうでしょう。それに、いつ龍がこの村を襲うかもしれないので、気が抜けません。

冒険者は村の大人たちと話し合い、龍の討伐依頼を受けることにいたしました。

しかし、その依頼は冒険者のその後を左右する大事件となるのです。

なぜなら……今まで長い長い旅を雨の日も風の日も嵐の日も吹雪の日も、文句一つ言わずに自分と共に歩いてきた美しい黒毛の賢馬が、山に住む小型の美しい白龍に出会い、一目で恋に落ち、異種間にも関わらず両想いになってしまうのです。

冒険者は悩みましたが、その山に残したとして討伐されるのは目に見えて居りましたので、黒毛の賢馬と白龍を連れ彼はまた旅立ちました。

長い長い旅を一人と二頭は歩き、走り、飛び、そしてある日……その足を止めました。

彼らは、大きな町の人間たちの中では決して許されなかった彼らの住める土地を見つけたのです。

その場所は、半分が人間の、もう半分は太古の動物たちの住む土地でした。一人と二頭は大地に根を生やしたその日から、村と森に分かれ生活を始めました。冒険者と賢馬が共に越えない夜は初めてでしたが寂しくはありません。なぜなら、お互いに数歩踏み出せばいつでも会える距離にいるのを知っていたからです。

人間の村の者たちは皆、森にすむ賢い生き物たちに慣れていたので、黒毛の賢馬と白龍を連れて来た冒険者にもとても親切で、時々

は独り者の彼に気を遣い、美味しい料理を振る舞ってくれました。そして数年後、彼は村の中で気立ての良く素朴な最愛の妻を得たのです。

また数年経ち、彼の妻が懐妊した頃……森から久しぶりに出て、冒険者に顔を出した賢馬は、その後ろに奇妙な幼い動物を連れていました。

その奇妙な動物こそ、この龍馬りゅうまなのです。耳にはさんだ程度ですが、研究者たちの話では……伝承に出てくる太古の動物たちの住まう森と言うのが、どうやら我々が目指す彼の地を囲むように存在する古の森であり 通称 賢者たちの迷路 と呼ばれる緑深い大木の生きる土地でございます。

龍馬のように、異種の両親の間に子供が出来たのは後にも先にもこれっきりで、龍の血が混じっているため一頭の寿命は長いのですが、雌の産む子供の数は少ないですし、何より近親同士でしか繁殖を行ってこなかったようで……年々全体数も減っています。

そこで、彼らの誕生に彼の土地が関係している事は明白であるからして、最近では絶滅してしまう前に調査を行いたいとおこなう研究者も多いのですが……固有種の動物たちが多いあの土地には制約も多く、先王の起こした問題や、これ以上彼の土地の主との間に問題を増やすわけにもいかないという理由で現在はある一帯が国の保護対象にも指定されておりますので踏み入った者は確認されております。

長いお話や補足を、すらすらと説明をし終え、一呼吸置いた後、満足そうに僕を見つめるルーに一言

「うーん……ほれぼれする美声だねえ。でもその伝承だと最初に言ってた恋のお話はどこに行くの？」

「昔の方は馬と龍の間に子が出来た理由を、双方の強い愛ゆえだ

と思っていたそうでございます。ですから、今でも伝承の載る書物は龍馬りゅうばを愛つを司かさねるシャシャ神の使いであるとしています」

「ふうん。まあ、実際は愛なんてもものじゃあ異種間で子は出来ないよね？」

「……おいおい、こんだけ説明させといてそりゃねえよ」

ガドガンも興味があつたのか何となく話半分には耳に入れていたようで、僕の枯れた返答に心底呆れたって感じで言葉を零した。

「ガドガンったら、いやだな。僕だって愛を信じてないわけじゃないよ？」

「ま、俺には関係ねえし良いけどなあ」

「……陛下！！聞いて居られますか？！この旅では出来る事ならかの地の土や木の枝や水を採取して来て欲しいと城に残してきた研究者の者たちによくよく頼まれているのです！彼の地の主にお話をなさる際はどうかこのことも交渉の端にねじ込んで頂きたく！！」

「……え？僕は聞いてないけど……」

|||||さいど　ガドガン・ドドッチ

俺様の名はドドッチ。

海を越えた大国で生まれ、長いこと旅をしたが、今はとある小さな小さな国の軍で総大将なんてもんをさせられている。それもこれも、あのルーイリアにさえ会わなければ絶対にありえないことだった。

今から十数年前、俺はこの小さな小さな国に流れ着いた。長く歩きどうしだったので早く宿に入りゆっくりしたかったのだが、俺の野性的な肉体は例え疲れていても素晴らしいもので……賑わう街の中の悲鳴を聞き分けてしまった。

まあ、聞いちまったものを無視できるわけもなく……しようがねえから取り合えず助けるため路地裏へ入り込んだのだが、俺は見た。ボロ衣を纏ったただけの汚いオッサンに押し倒されていたのは、着ていた服を裂かれ真っ白な肌を弄られ、抵抗できないようなのかその美しいミルク色の長い髪を千切れっちゃうんじゃないかと思うほど強く掴まれた　ルーイリア少年だった……。

あいつを一目見た瞬間、俺の人生は変わった。

あの汚ねえオッサンはぼこにして放り出した後、まあ幸いなことに弄られただけだったが、それでもショックで動けないでいるルーイリアを俺の着ていたデカイ外套に包み、元々泊まる筈だった宿よりも数倍高級な宿に足早に、優しく運んでやった。ま、宿泊料金は跳ね上がったが、あっちこっちで稼いでいたから懐の心配は無用で、この時ばかりは金に無頓着で使わずにいた自分を褒めたな。

その日からずっと、俺は寝込んだルーイリアの看病に追われた。何日経ったか、やっと目を覚ました時、あいつは怯えるばかりでまったく話にもならず、何日も何日もかけてあの宿の一室で心を休めることに専念させ、やっと打ち解けたと思えば、あいつは将来を期

待されて学院で学ぶ裕福で生真面目な学生。俺は、まあ金の心配はないとはいえ根なし草だ。

正直、釣り合うわけもないと思った。だから、あいつの怪我や心の傷もそこまで目立たなくなった頃……俺は宿代だけを多めに置いて部屋を出た。

それから俺は無駄に多い伝手^{つて}を使い軍に入隊し、数年かかったが意外と簡単に位が上がったのは幸いだった。その頃にはあいつも文官見習いとして城に勤め始めていて、たまにすれ違う事もあったがあいつは俺に気づきもしない。

それと言うのも、初めて会った頃の俺は長旅をしていたせいもあってボサボサの長髪に髭もボーボーだったし、若いころからガタイだけデカかったから老けて見られることも一度や二度じゃなかった。なにより、あいつに名乗った名は俺のミドルネーム イシユール。軍の証明書にも頭文字しか載せていないから頭の固いあいつが気づくことはきっとないだろう。

それでも、あいつが元気で幸せそうに勉学に励む姿を見かけると、俺も少し幸せになれたし、何より安心できた。新しい国王が決まり、これまでの実績や年の近いものを照らし合わせ側近に俺とあいつの名が連^{つら}なった時は歓喜に腕を振り上げたものだが……。今となっては、何が気に食わないのか毎日毎日俺にいちゃもんをつけてきやがる困った奴だぜ。

年々僻みっぽい婆さんのように口煩くなりやがるし……。

今回の旅も、同行者が国王のディアや宰相のルーイリアじや野営をするわけにも行かんから一日の終わりにはこちらと小さくても宿のある村に着くように計算して日程も組み、初心者にもやさしく足の速い貴重な龍馬^{りゅま}まで知り合いに頭下げて借り受け、こうして一見のんびり進んでいるようでちゃんと警備しているってのに罵られるし……。

「あゝあ、俺って可哀想な奴」

「ガドガン？村へはあとのくらいで到着するの？」

呑気なもんだぜ、ディアはいつもと変わらぬ口調で微笑みながら俺に聞く。

「あ？そうだなあ……あと半キトも我慢すれば宿で美味しいもん食わしてやるよ」

はぁ……後ろでまあた宰相様がぴーぴー言い始めたぜ。これ以上俺にどうしろってんだか……。

旅路とそれぞれの想い（後書き）

正直まだガドガンの気持ちが測れていないので、その辺はまた次の機会に。

誤字脱字等ございましたらどうか、優しくこっそりご一報くださいます。

目標×決意

ゆらゆら　　ゆらゆら

熱湯の中でうとうと　と微睡み、どれほど時間が経過したのか。
この地中深い源泉の底にいる今は、陽の光も届かない以上分かるはずもない。

（ああ、よくねた）

他に生き物のいない暗闇の中で、大きく欠伸をして、お湯の身体に必要かは知らないけれどぐうーっと伸びをして気持ちの凝りを解すように腕を回す

（……それにしても暇ねえ。何しようかしら？）

正直この世界に来てからと言うものの、寝ているか探索するかくらいで他にすることも無い。この地下源泉の後行こうと思っていた穴の先は危険だと手紙を読んで分かった以上、あの先へ進む気も起きないし。

（ふむ、そう言えばこの土って……日本なら泥のスパとかに使え
るんじゃない？ミネラルとか豊富そうだし）

ああ、私が人間だったなら、温泉に泥のスパに、これだけでも一日中リゾート気分満喫できそうなのに。むしろ、温泉宿とか経営出来るんじゃない？

（あゝあ、この身体さえお湯じゃなければ……。いや、よく考えたらお湯じゃなかったらこの泥も見つけられないし熱湯温泉にも入れないけど）

なんか、堂々巡りのような気もするけど、思い返せば地上の森に生えていた雑草だと思ったあの背の高い植物たちもそう考えると高級そうだったような……。もしかしたら秘境の高麗人参みたいな高い薬草なのか？

（……採取して見ようかな）

温泉から長いこと離れるのは難しいけど、びゅっ行ってさっと帰ってくれば……。

（うん、やることも他に無いし。色々採取して干して、この泥も何かに使えるかも知れないし上に運んで乾かして見ようかな）

とりあえずは、一掬いだけを手に持ち、また出入り口となる狭い穴へ

（今度は流れに逆らわなくても良いから身を任せるだけで楽だわあゝ）

目下の目標を決めたことで、すいゝと楽しげに泥を持ち穴を流れる私も所詮は唯のお湯、しかも色は周りの熱湯と同じ無色透明なので、はたから見ればただ丸い泥がお湯に押し流されているようにし

か見えないだろうけど、今の気分はこの世界に来て初めてって言うっても良いほど最高潮なのでまあ気にしないでおう！

（そうだ、この泥を乾かした土で何か植物を育ててみるのも良いかもしれない。意外と栄養分の豊富な美味しい野菜とか新発見の花とか出来るかも）

……温泉の淵に小さな畑と花壇を作るのも良いかもしれない。そうしたら、動物とかが食べ物目的で近づいてくるかもしれないし、可愛い生き物だったら仲良くなるのも楽しそう。

（なあんだ、先代の手紙にはつまらないって書いてたけど。意外とこの温泉だけでも十分楽しく生活できそうじゃない）

少なくとも、つまんないと言う理由で人間の男に恋することは絶対じゃない。と言い切れるし、まずは温泉周りの改造とかしたいから時間にかかるし、そんな暇もないだろう。

（大体、あんな手紙遺されたらこの森にいるのも怖いつてーの）

いったいなんの儀式なのか、この国の王様の代替わりの時は問答無用で人間が来るらしいから、そのときは兎に角、私が意志を持つお湯の精霊だとばれないように、そしてなんとか、この場所にいた先代は亡くなりましたからもうその儀式は無駄です。と伝える方法を考えなければ……

（私は、貴女と同じ轍は踏まないわ）

漁村その？

さいど ガドガン・ドドツチ

ルイーリアの話聞きながら進むこと四キト半、緩やかな坂道を越えると、道の端に見える木々の間に古めかしいが小さな門が見えてきた。

「ああ、やつと着いたか……」

「あれが今夜の宿になる村？ 門構えに何となく趣おもむきを感じるねえ」

「しかし、時間がかかり過ぎなのでは？ ガドガン！ 日程は貴方にお任せしていたはずでは……？」

俺は背後から念仏のように聞こえてくる小言や、国王のどこか気の抜ける問いかけをことごとく無視し続け、やつと見えてきた村の入り口に目をやり、歩き続け疲れただろう龍馬りゅうばの垂れた耳を撫でてやった。

「おい！ルーイリア、通行証はどこにやった？」

小さくても人の住む集落には必ず門番が存在し、彼らはその全てが王国の軍隊に所属しており、つまりは全員俺の部下ってことだ。まあ、だからと言って全員が俺の顔を知っているわけもねえから顔パスにはならねえが。

「通行証ですか？それなら……」

それにこの旅は一応極秘扱いだからなあ……呼び方も陛下だの宰相だの言ってられんのも人のいない田舎街道だけで、こうして村や町に辿り着けば名前呼びは当たり前。普段は畏れ多いだのなんだのとピーピーうるせえ宰相様も、こうして大人しくなるし、まったくもって極秘さま様だぜ！

「来る途中は誰ともすれ違わなかったのに、門の前に並んでいる人は随分と多いのだねえ？」

自分の生まれ故郷と王城しか知らない我らが国王は、ぼうっと人の列を眺めそう呟いた。

「あ？ああ、あっちに分かれ道があんだろ？あちは海沿いでな、朝早く漁に出て、取れたての魚をたっぷり瓶かめに溜めたら村に戻んだよ。だから、並んでんのは大体この村の奴だろ」

微かに磯の香りが風に乗り、ルーイリアの長いミルク色の髪を揺らした。

「へえ、ならこの村では新鮮な魚が有名なのかい？」

ばやばや王様が瞳を輝かせて問いかける。

実は、小さな小さな王国の城は内陸部に位置するため、なかなか新鮮な魚介類は手に入りにくい。自然口に入るものは限られてくるのもあり、こうして泊まる村々でその土地の美味しいものを食べれるのも旅の醍醐味と俺たちは楽しんでいた。

「へえへえ、村に入ったら新鮮な魚料理を腹いっぱい食わしてやんよ……ルーイリアが」

ああ、思い出すだけで涙がでてるぜ……。俺たちが王都を出てずいぶん経過しているが、経路や日程は俺に丸投げしといて経費は全部宰相様の管理下にあるこの旅は……。俺には厳しく、王様には胸焼けするほど甘い。

確かに元々は、この旅費も国民の血と汗と涙の税金から捻出されてはいるが……。この国の抱える大きな問題を解決すると言う重大な役目を担っているため、予算はたっぷり出ているはずだ。

だと言うのに！宰相様は財布のひもを固く硬く縛り、必要のない時には自分の懐深くしまっているため俺にその恩恵がもたらされることは一度としてない。

「ええ、ええ、デイルが食べたいと仰るならいくらでも注文して差し上げますとも！！」

そう胸を張って王様を見つめる宰相様の瞳は、以前孫が生まれたと大喜びしてその給与のほとんどをプレゼント代に費やしていた某大臣のようだった。

「はあ……」

宰相よう、お前はいつから孫を溺愛する祖父母になったんだ？…
…前の村じゃ俺が自由時間の小遣いを渡せといくら迫っても小銅貨一枚も渡さなかったってのによ、だあああ！！思い出すだけで苛つく！！

俺はのろろと進むこの列の先にいるであろう会ったことも無い部下の方向を向き、呟いた。

「さっさとしねえと、城に連れて帰って俺様の特別訓練に参加させるぞ……？」

ああ、この問題が解決して城に帰ったら、気を引き締めるためにも辺境にいる名も知らぬ部下達を城に詰めている部下と交代で招集して特別メニュー組むのも良いかなあ……。

ま、完全八つ当たりだが

漁村その？（後書き）

誤字脱字以外にも、感想や一言お待ちしております。

お婆ちゃんの知恵袋×掌の使い方

さて、すいすいーつと流されまくり、私は地上へと戻って参りました。

「うーん」

手には泥、目の間に広がるのは平地と深い森。

「何から手を付けるべきか……」

まずはその辺に持っていた泥を置き、自分の身体から出ている湯気を手で払いながら、一応腕を組んで考えてみる。

「あつ、婆ちゃんの三か条！ あれだわ！！」

婆ちゃんの三か条とは、私のお婆ちゃん曰く、いつ何時予測なんどきの出来ない事件や大災害に見舞われるか分からない以上、どういった状況でも生き残れるようにと考え抜いたサバイバル術らしい。張り切った婆ちゃんは親族の集まりの折には何時も全員を広い和室に集め、婆ちゃん直伝のサバイバル技術を半ば無理やり教えて下さる。と言う有難いようでとてもなくてはた迷惑な伝授で有らせられるわけだ。

「大体教える内容に難ありすぎなのよ。親戚全員ってことは赤ん坊から腰の曲がったおじいさんまでいるってのに手加減は一切なしの恒例行事だし、皆もう諦めてるもんなあ。去年はトシ叔父さん腰を強打して病院に運ばれたし、今年はケイ君が骨折して高熱出しちゃって入院しちゃうし、毎年毎年犠牲者出し過ぎ！ 病院にも顔覚え

られてるし、もう恥ずかしい……ってそうじゃなくて」

……半ば体力勝負な感じのある実家への里帰りに、私達はいつものいつも戦々恐々しつつ、行かないわけには行かないのだともう刷り込まれているので、実家からの電話が鳴れば仕事中だろうと、恋人といちゃついてようと、マサ君のように待ちに待った修学旅行の出發日だろうと問答無用で脳内は対お婆ちゃん仕様に切り替わるのだ。

「まあ我が家に生まれた以上は悲しいけど逃げることは出来ない定めよね」

まあ、今回はそんな何に役立つのか甚だ疑問だったそのサバイバル術もやっと日の目を浴びるわけで……と言っても畑づくりの部分だけ抜粋して、だけど。

まず

「なんだったかなあ、なんか無駄に婆ちゃん迫力あり過ぎて緊張してたから座学あんまり覚えてえない……。あつ、そうだ！畑や花壇を作るときに注意するべきことは、植物も生きモノであるからして、彼らの布団である土はふかふかにするべし！！みたいな」

なんかニュアンスは違うかもだけど、まあ意味は通じるでしょ？

「って言っても、ふかふか……ねえ？」

とりあえず地下源泉の泥を運んで、あと森に落ちてる枯れ葉とか集めればいいのか？あとは、土も熱湯消毒したほうが良いとか聞いたような聞かないような……まあ熱湯ならここには溢れるほどあるから何時でもできるけど。

「道具はどうしようかな？ 婆ちゃんに配布されて何時も持ち歩いてた小型の多機能サバイバルナイフはここにはないし。ん？ そういえば水ってなんかこう、鋭くさせたら鉄も切れるって聞いたことがあるけど……私にも出来るかな？」

組んでいた腕を解いて、湯気の立つ自分の手のひらを目の前に持つてきてじっと見つめてみる。

「……はあ、いくらなんでもそれはないっ」

諦めかけたその時。じっと見つめていた手のひらは、ため息を吐いた途端勝手にぴゅーっと伸びて森に生えていた大木を貫いた……。次の瞬間、ずどおん……と音を立てて、私の想像を超えるであろう長い月日を生きてきたはずのその幹は折れ曲がり、そしてその命を終えたわけで。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

そんなつもりは全く持ってなかったし、見た感じ貫録の有りそうな立派な大木なので、きつとここを住処にしていた動物とかいたんじゃないだろうか？ なによりその大老木自身に意志があったとして、呪われたらどうしよう……。

これで道具を作るめどはたっただけれど、居た堪れないこの空気、私は泣きそうです。

成仏×植物三人衆

しばらく呆然としていた私も、はっと気を取り直し、老大木に向かい静かに手を合わせた。日本式で申し訳ないとは思ってもそれ以外は知らないので、まあ許してくれるだろうと甘い気持ちで。

「……世の中そんなに甘かないわ。なにあれ？」

手を合わせた途端、その大老木が長年生えて居られたであろう緑がうっそうと茂るその場所から……何か、そう言い表すなら小さい足の生えた丸っこい何かの植物が現れて？

「ぽっ」

ぽっ？ぽっ、てなに？思わず、その丸っこい生き物と一緒に首をかしげて……ん？

「ぽっ……ぽっぽっぽっぽっぽ」

何かを話しているんだろうことは見ればわかる。だけど如何せん、その話している言語？が分からない！！

「あの、もしかして……そこにご臨終なさっている老大木とお知り合いだったりする？」

頭が黄緑で身体は茶色。これはもう植物以外の何物でもないし、出てきたところが……ねえ？

「ぽっぽお！！ぽっぽっぽぽぽぽぽぽぽぽ」

「あっ、待って待って！！君の言ってること全然分からないから！！」

きっと正解なのだろうけど、この丸々した植物の言語が全然理解できない。……どうしたものか？

「それでええと、とりあえず、ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったんだけど、あの木倒しちゃって……」

「お前馬鹿じゃねえの？あの木の爺さんはもう寿命だったんだよ！！まあ、住処はなくなったから責任は取ってもらうけどな！！」

ふんっ！！と荒い鼻息と共に聞えた罵り……。え？誰？

「……何時までその阿呆みたいな顔晒してるつもりだよ？！さっさとその美味そうな土を寄越せ！！」

「……」

今の、この、まるい植物が……？何で？今まで可愛くぽぽぽって言ってたのに！何がどうしてそうなったの？！しかもなんでそんなに偉そうなの？！ちびのくせに！まるいくせに！確かに住処は奪ったけど、寿命だったにしては俺様が過ぎるでしょ！？

「なに黙ってんだよ!!」

「アン君、精霊様にそんな言い方、駄目だと思っただね」

「……うん。アンはダメ」

へっ?! 目の錯覚?! もう二人出てきたあ!!

「うるせっ!! ドウもトロワも腹減ったんだろ?!」

「でもそれは、精霊様のせいじゃないんだね。もともと爺ちゃんがもう土に返るからって食べものなかったんだね」

「うん……爺ちゃんいない」

全員が黄緑と茶色とまると言うキーワードを元に作られたようになそっくりさんで見分けがつかない。何より三人とも私を無視して話し続けるからなんだか居心地も悪い。……あれ? ここ私の場所だよね?

「でもっ!! 前の精霊様のせいで沢山仲間が死んだのは誰が責任取るんだよ?! 俺達もこのままじゃ餓死だぞっ!!」

「それは、前の精霊様のせいだね。今の精霊様は違うもんね。今の精霊様が生まれてから、この土地も元気になって来たもんね」

「うん、トロワ元気」

うん、何お話かな? 前任者の問題はノータッチでお願いします!!

「ね、ねえ？とりあえず、お腹空いてるならこの土？食べても良いから、喧嘩は止めようね？」

そう言って差し出したのは、地下から運んできたミネラル豊富な一掬いほどの土。先ほどから寄越せとアン？とか言う子に求められていたのはこの土だ。美味しいのかは謎だけど、まあ地下に行けばいくらでもあるわけだから欲しいなら差し上げましょういくらでも！！こんなもので喧嘩を止めていただけるのなら！！

成仏×植物三人衆（後書き）

一応今回の補足として。

主人公

元地球産の人間（女）現在はまあ、温泉の精霊と言う役割を押し付けられ、半ばやけくそでスローライフの新境地を開拓中。

アン・ドゥ・トロワ

大老木に住んで居た植物の妖精。前の精霊の事件でかなり深刻な被害を被っていたらしい三つ子。

ちなみに王国組・その他は、また次の機会にでも書き込ませていただきたいと思います。

感想お待ちしております!!

漁村その？（前書き）

王国組は、物語的にも旅路的にも歩^{あゆ}みはスローです……（苦笑）

漁村その？

****s i d e ルーイリア・シエイル

さて、やっと安心して休息の取れる場に降り立ち、私も一安心しわたくしております！！

「腹減ったなあ……さっさと飯食って寝ようぜ」

ガドガンは相変わらず身勝手でどうしようもありませんね。こういった者はたとえ神の身元へ呼ばれようとその本質は変わらないと良く言いますし、諦めるよりほかにはありません。

「うん、美味しい魚料理を食べてすぐに寝ればいい夢が見られるかもしれないねえ」

陛下はとても嬉しそうに食事のお話をされておられますが、

「へい、ではなくデイル、はしたないですよ？まだ宿に着いたばかりで、誰に聞かれるかわかりませんので謹んで下さい」

あやま誤って、公共の場で陛下と口にしてしまうところでした。こんなところで身元を知られるわけには参りません、気をつけなくては。

「いらっしやい、何人だい？」

宿の中へ足を踏み入れ、受付のあるカウンターへ向かうとそこには恰幅の良いご婦人が居られました。

「失礼いたします。わたくし 私たちは」

今までは宿の対応など他者と関わる事柄は全てガドガンに任せ、金銭の支払いだけは私わたくしがおこなって居りましたが、たまには自分で交渉するのも良い勉強になるのでは？わたくし と思い、気軽な気持ちで丁寧

に礼をして話したすと、ガドガンが私わたくしとご婦人の前を遮り

「……三人だ。一泊するから三人一部屋か、それが駄目なら二人部屋と一人部屋に分けてくれ」

「……あいよ、ちょっと待っとくれ」

わたくし ご婦人はガドガンの言葉を聞き、少し考えるようなしぐさをして私の方をちらりと見てから、手元の台帳で部屋の確認をしているようでございます。ですが、それよりも！ガドガンはなぜ、と彼の顔がある高さへ顔を上げると……

「今は黙れ、後で話す」

険しい表情を浮かべ小声でそう言い捨てたガドガンは、次の瞬間にはいつもの脳みそまで筋肉な彼に戻り、私わたくしは……どうしてでしょう？とてもいけないことをしてしまったような気がして、胸がざわざわと落ち着きません。

「そうだねえ……三人部屋は全部使用中だね。二人部屋と一人部屋なら隣同士並んだ部屋が二階の角にあるけど、どうするね？」

「ああ、それで良い。料金は先払いで良いか？」

ガドガンは横目で私を見て宿のご婦人に問いかけます。

「勿論構わないよ、ちなみに風呂はこの宿を出て左にあまり大きくないけど海水沸かした大衆浴場があるし、食事は此処の一階が食堂兼酒場になってる。まあここ以外にも美味しい食堂は沢山あるから声をかけてくれれば場所は教えるよ」

「助かる、それじゃ……おいルーイリア」

宿のご婦人へそう告げると、ガドガンはそれが当たり前かのように私の名を呼び、その無骨な厚い手のひらを差し出しました。

ざわざわと落ち着かない自らの胸に、ガドガンとは正反対の血管が透けて見えるほど白い手を置き、これはもしや平民の言う恋人のようなやり取りというもののものでは？とおかしなことが脳裏に浮かび、少々動揺してしまいました。

……昨夜寝物語に読んだ恋愛小説の影響でしょうか？

「……い！おい！……ルー！！」

はっ……考え事を始めると外の声が聞こえなくなる悪い癖が出てしまったようです。ガドガンは……その額に青筋を浮かべ、とてつもなく怒っているように見えます。

「あ、お支払でしたね？おいくらになりますでしょうか」

しかし私はガドガンの眼力などに負けるわけには行きません！！と、言うことでその恐ろしげな視線はまるっと見なかったことにしまして何事もなくその場を潜り抜け……られたのだとその時は思っていました。

……宿の部屋に入り、ガドガンに部屋の隅へと追い込まれるまで

は！

漁村その？（後書き）

漁村そのゝは、もう少し続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8805w/>

わたし×とりっぷ×おんせん

2011年11月17日17時03分発行